枕草子初段の構想と類書の構造

上野　理

教室で「春曙」や「秋夕」の話をしたとき、学生の福沢博子さんが清少納言は空に強い関心を寄せているという注意をした。それはなぜだと思うかと問い、彼女の答えをききながら、「空」は「天」だ、作者は「天」をかこうとして「就中偏好是春天」の詩句を想起した、「春天」に問題がしぼられ、それにつづく「霞光曙後殷於火　草色晴来嫩似煙」からきわめて容易に「春曙」の美を「発見」し、これをかいたのだ、と作者の心を推測し、また同時に岡田潔氏の「枕草子初段〈春は曙〉考」(『女子聖学院研究紀要』昭46・11)をおもいだしていた。岡田氏は《能因本》の「長跂」にみられる「雨・風・霜・雪」が初段にそろって登場する不思議さを指摘していた。

作者は空に強い関心をよせている。春は東山のうえの空をながめ、刻々とかわる光景にみいる。夏に入ってもその視点はうごかない。月も螢も雨脚も距離に遠近のちがいはあるが、作者は空をみる。秋になって方角は西に逆転するが、やはり山脈のうえの空をみる。彼女の目は夕焼け空に烏や雁の群れをおうが、日没とともに目は空からはなれる。素材となった日月雲や「雨・風・霜・

1

『枕草子』初段で清少納言は、「春曙」の美をはじめて指摘したが、その説明は十分ではない。「やうやう白くなり行く山際すこしあかりて紫だちたる雲の細くたなびきたる」は「曙」の空を説明したもので、「春曙」の記述ではない。おそらく『白氏文集』巻三一「早春憶蘇州寄夢得」の「呉苑四時風景好　就中偏好是春天　霞光曙後殷於火　草色晴来嫩似煙…」によって作者は「春曙」の美をしり、のちに『和漢朗詠集』にもおさめられる著名な詩句でありながら注目されることのなかった「春曙」をはじめて指摘することに意味を感じ、詩に発見した美をしるした。こんなことを考え、これを「春曙考」(『文芸と批評」昭43・4)にかいた。

もちろん、彼女が美しい「春曙」をみたことを疑うわけではない。白楽天の眼を自分の眼とした彼女の目には、曙の光をうけた横雲は赤く燃え、煙よりもやわらかな若草色の東山がうつっていたろう。彼女はまた「春曙」に対比させて新しい「秋夕」を発見し、その美を読者に教える。

雪」はみな天象に属すが、冬の雪は空に舞う雪ではない。霜と同じく地上にふりつもった雪のようだ。関心を地上にうつした彼女は火をおこして炭をはこぶ廊下や渡殿の光景をみ、最後に火桶のわきにすわってその死灰にみいる。作者はなぜ「天」に執着して多数の天象を素材にし、最後にその執着をたちきって自己の身辺に視点をうつすのだろう。

天象に関する章段として『枕草子』には、「日は」(252)「月は」(253)「星は」(254)「雲は」(255)がある。池田亀鑑は『全講枕草子』(昭31・11)で右の四段を「分類・自然現象に関するもの」に分類し、全章段中でもっともはやく、しかも連続してかかれたと推測する。

以上「日は」「月は」「星は」「雲は」の四段は、諸本のどれもこの順序で、まとめて記されている。(ただし堺本は「星は」を欠く)これは作者が執筆した折の順序と解されはすまいか。文章がどれも短く、紙の一面に続けて書き得るということも、この推定を支持するであろう。作者がはじめて枕草子を執筆した折の意図は、辞書的な美の分類を、体系的に述べるところにあったものと考えられるが、その最初に構想されたものは、おそらくこの日・月・星・雲などの天体現象であったであろう。これは天地玄黄とか日月星辰とかの、支那的な分類であって、辞書的な書物を執筆しようと意図した作者が、当然採用したものと考えて誤りないと思われる。

池田亀鑑は「美論としての枕草子」(『国語と国文学』昭5・10)や岩波講座日本文学『枕草子の形態に関する一考察』(昭7・6)で「とにかく枕草子は学問的には類聚抄・芸術的には六帖の感化を受けて、特殊な分類法を用いたのではないか」「倭名類聚抄又は古今六帖の分類と枕草子のそれとを比較すれば、実際に於て密接な関係が見出される」といって以来しばしばくりかえす発言をこでもする。たしかに『枕草子』は現在の初段「春は曙」からかかれたことはあるまい。しかし、この四段からかきはじめたという池田説もいかがであろう。もちろん「支那的な分類」方法がとられていることは認める。また、この種の部類、配列は各種の類書や字書にみられるものだが、類書や字書はつねに「天部」ではじまり、「天部」の冒頭に「日・月・星・雲」が存在することも事実である。したがって『枕草子』に「支那的な分類」がみられることを承認すると、「日は」「月は」「星は」「雲は」の四段がかつてその「巻頭」に存在したことを想定する必要がおこってくるが、これはこの四段をまっさきにかいたことにはならない。

作者はまた「日・月・星・雲」の順序を意識したとも、「支那的な分類」方法を採用したともいってはいない。彼女の分類や配列の方法は現存本の配列順序からさぐることはできないが、≪三巻本≫の「跋文」の

おほかたこれは、世の中にをかしきこと、人のめでたしなど思ふべき、なほ選り出でて、歌なども、木・草・鳥・虫をもいひいだしたらばこそ、思ふほどよりはわろし、心見えなり、とそしられめ。

「木・草・鳥・虫」は彼女の分類学を復原する貴重な資料である。「花の木ならぬは」(40)にも、「をりにつけても、ひとふしあは

れともをかしとも聞きおきつるものは、草・木・鳥・虫もおろかにこそおぼえね」という類似した記述がある。

「木・草・鳥・虫」「草・木・鳥・虫」に関して松田武夫氏は『評釈枕草子』（昭42・4）で、これらを「自然物の代表という意味」であるといい、『古今集』「仮名序古注」の「これはよろづの草・木・鳥・獣につけて心を見するなり」と『三宝絵詞』の「木草・山・川・鳥・獣モノ・魚・虫など名付タルハ」を例に引く。『枕草子』の「木・草・鳥・虫」が自然物を「代表」していることは松田氏ののべる通りであろうが、その代表のしかたも考えねばなるまい。「跋文」は「木・草・鳥・虫」などに関する発言であっても他人の批判のまぬがれがたいことをいい、「花の木ならぬは」では「草・木・鳥・虫」のようなものにも注意をおこたらなかったことをいう。これらはたんなる「自然物の代表」ではあるまい。「自然物」のなかでとくに軽微なるものの「代表」ではないか。ふつうの類書や字書は「木部」「草部」「鳥部」「虫部」を巻末におく。《能因本》の「長跋」は、この推測を補強してくれる。

又それもさることぞかし。人のもののよしあしいひたるは、心のほどこそ推しはからるれ。ただ人に見えそむるのみぞ、草木の花よりはじめて虫にいたるまでねたきわざなる。なにごともただ我が心につきておぼゆることを人の語り、歌、物語、世の有様、雨・風・霜・雪のうへをもいひたるに、おかしくけうある事もありなん。

「草木の花よりはじめて虫にいたるまで」（〔草・木・鳥・虫〕）と「雨・風・霜・雪」が〈自然物を代表する〉かたちで登場するが、その重さはちがう。前者は、そうした〈軽微なるもの〉に関連した軽い作品であっても、他人の目にふれたことを恥じる文脈にあるが、後者は、作者が自己に即して表現した場合は、「をかしくけうあることもありなむ」という、いったんはそれを肯定する文脈に登場する。「人の語り、歌、物語、世の有様」に対してもっとも貴重な自然物で代表させたのではないか。「雨・風・霜雪」は「天部」に属し「木・草・鳥・虫」の巻末に対し、類書や字書の巻頭をしめる。

清少納言の分類学は「雨・風・霜・雪」ではじまり、「木・草・鳥・虫」におわるようだ。しかし前者は〈貴重なるもの〉、後者は〈軽微なるもの〉を代表したのであり、「雨」以前、「虫」以後になにものも存在しないというわけではない。また〈軽微〉とは彼女が軽視した意味ではない。「木の花は」(37)「花の木ならぬは」(40)「草は」(66)「草の花は」(67)「鳥は」(41)「虫は」(43)の章段は「跋文」でいう〈目に見え心に思ったこと〉をかくすぐれた作品である。作者は社会通念にしたがって〈軽微〉と評価するが、〈軽微なるもの〉の「代表」としてとくに選択したのは「木・草・鳥・虫」をぎゃくに重視したことを意味する。「雨・風・霜・雪」が〈貴重なるもの〉のうち、とくに作者の関心をひくものであったことはいうまでもない。

2

類書や字書は「雨・風・霜・雪」のまえにつねに「日・月・星

・雲」をおく。

『万葉集』巻七「雑歌」

詠天一首　詠月十八首　詠雲三首　詠雨二首　詠山七首……

『新撰字鏡』

天部一　日部二　月部三　肉部四　雨部五　風部六　火部七

……

『千載佳句』

四時部（省略）

時節部（省略）

天象部

月　風月　感月　雨　風雨　暮雨　雨夜　晴霽　雪　雪夜

春雨　晴雪……

『倭名鈔』第一「天部第一」

景宿類第一

日　陽烏　月　弦月　望月　暈　蝕　星　明星　長庚　牽

牛　織女　流星

雲雨類第二（省略）

風雪類第三（省略）

『古今六帖』（第一）

歳時（省略）

天

漢渚（「目録」には「あまのはら」）照日　春月　夏月　秋

月　冬月　雑月　三日月　夕月夜　夕暗　星　春風　夏風

秋風　冬風　山下　嵐　寒雨　夕多千　雲　露　志津久

霞　霜　雪……

『江吏部集』上

天部

月付月露　風　雲　雨　雪

『能因歌枕』

天地　道　夜　山　日　朔日　月　晦　風……

『本朝無題詩』

巻一行幸（以下省略）

巻二天象

（月）（雪）（雨）……

『綺語抄』天象部

天　日　月　雲　霧　霞　雨　雹　雪　霜　風

『類聚古集』巻第五「天部」

天　日　月付初月　雷　雲　風　雨　霧付露霜　霜　煙

『類聚古集』巻第十六（東歌）「乾象部」

日　雷　雲　霞　風　雪　霰

『和歌童蒙抄』天部

天　日　月春月夏月秋月冬月　風　雲　雨春雨時雨　五月雨　霞　露

霧　霜　雪　霰

『秘府略』『楊氏漢語抄』『弁色立成』『東宮切韻』『菁華抄』の詳細は不明だが、やはり「日・月・星・雲」は「雨・風・霜・雪」のまえにおかれていたろう。これらの書物はみな、中国の類書の影響下にあった。

『芸文類聚』

第一巻天部上
天　日　月　星　雲　風
第二巻天部下
雪　雨　霧　雷　電　霧　虹

『初学記』
第一巻天部上
天一　日二　月三　星四　雲五　風六　雷七
第二巻天部下
雨一　雪二　霜三　雹四　露五　霧六　虹蜺七　霽晴八

『白氏六帖事類集』巻第一
天第一　地第二　日第三　月第四　星第五　明天文第六
晨夜第七　律歴第八　律呂第九　雲第十　雨第十一　雪第十二　風第十三　霞第十四　霰第十五　雷第十六　雹第十七　虹蜺第十八　天河第十九　霜第二十……

「雨・風・霜・雪」ではじまる類書はない。「日は」「月は」「星は」「雲は」の章段が存在する以上、『枕草子』もふつうの分類方法を採用したと考えてよいのではないか。《能因本》の「長跂」が〈貴重なもの〉の「代表」として「雨・風・霜・雪」をあげ、「日・月・星・雲」を無視した理由は不思議であり、不可解だが、「長跂」執筆時の彼女の関心のかたよりによるのだろうか。「降るものは」(250)「風は」(197)やそれらにつづく章段(251)(198)(199)には独自の観察や発見もみえ、意にかなった作品ともいえるが、関連章段の成立にかかわる問題のようだ。

しかし、「日・月・星・雲・雨・風・霜・雪……」で類書の冒頭部分がすべてそろったわけではない。「日」のまえにある「天」がない。清少納言の分類学に「日・月・星・雲」があったことは「日は」「月は」「星は」「雲は」の存在から推測した。「木・草・鳥・虫」にもこれに相当する章段があるが、「天」に「天は」はない。「天」を欠く類書もないわけではないが、やはりみようだ。教室で、作者は空に強い関心をよせているという学生の指摘をきいたのは、「天」を欠く不思議さを考えているときであった。

初段の「春は曙」は、「天は」に該当する面をもっている。「春」から「秋」にかけて作者は空ばかりみつめている。「天は」をかこうとしたから、「就中偏好是春天」の詩句を自然におもいだし、「春曙」の美をかくこともできたのだ。「夏天」「秋天」「冬天」という言葉もある。「天は、春は曙。夏は夜。秋は夕暮。冬はつとめて」という文章構造もおかしくはない。しかし、初段のかきだしは「天は」ではなく、主題も「冬はつとめて」の部分は「天」からはなれている。

岸上慎二氏は『中世文学Ⅰ』(昭38・12)で初段の特殊な文章構造に注目し、

「春は曙」の段をみると、単なる類聚の章段ではなく、却つて記事評論のやや複雑な形式であつて、枕草子の内容から見ると、もつとも進んだものに属するものであると見ねばならず、その点先づ第一に執筆せられたものでなく、相当量の執筆の後、作者により再編成が必要とせられた折、新に企劃されて執筆されたものと考へたい。

と推測している。相当量の〈類聚段〉を執筆し、「再編成」を必

要としたとき、作者は類書の構造を強烈に意識し、「天」の不足に気づいたはずだ。しかし、相当量の〈類聚段〉をかいた彼女は、自己の発見を通して自分を語りたい気持をつのらせていたし、その章段は「巻頭」をかざるにふさわしいものでなければならなかった。

自分の発見をかきたい作者は、「天は、春天。夏天。秋天」と品名を列挙するだけでは満足できない。その美しさを描写するが、「冬天」はかきにくかったであろう。「冬天陰気多」(『晋書』「天文志」)といわれ、「をかし」「めでたし」とは遠い。

日は入り日。入りはてぬる山の端に光なほとまりて赤う見ゆるに薄黄ばみたる雲のたなびきわたりたる、いとあはれなり。(252)

月は有明の東の山際に細くて出づるほど、いとあはれなり。(253)

雲は……明けはなるるほどの黒き雲の、やうやう消えて白うなり行くも、いとをかし。(255)

右の「日は」「月は」「雲は」の記事と初段の「雲」「月」「日」の類似は説明を必要とすまい。「春は曙」の「やうやう白くなり行く山際」の「雲」を「雲は」の引用した記事はいう。作者は「春は曙」「秋は夕暮」で「山際」「山の端」に執着したが、「日は」「月は」にも「山の端」「山際」がある。初段の日も「日は」と同じく落日であった。初段の執筆をあととすれば、「日は」「月は」「雲は」の視点にたち、すでに決定した評価にしたがってかいたことになる。「冬天」で「をかし」「めでたし」となる素材は雪であろう。「降るものは」(255)で

降るものは雪。霰。霙はにくけれど、白き雪のまじりて降る、をかし。(250)

空中に舞う雪やたばしる霰や霙をいうが、彼女の「雪」は降る雪ではない。つづいて「雪は」(251)に

雪は檜皮葺、いとめでたし。すこし消えがたになりたるほど。またいと多うも降らぬが、その目ごとに入りて黒うまろに見えたる、いとをかし。……(251)

自分の発見した雪をかく。「冬はつとめて」で作者は空をみることをやめ、地上の霜雪をいうが、「長跋」と共通する「雨・風・霜・雪」は空中にみたものではない。初段の主題を「天」に限定すると、これをすべて逸脱する。「天」は「天空」ではなく、「天象」に拡大して理解する必要がある。

「天」に重点をおきながら、日月雲雨風霜雪という類書の冒頭部分をしめる「天部」の重要事項が初段に集中的にあらわれるのは、けして偶然ではあるまい。相当量の〈類聚段〉を執着し、その「再編成」を必要としたとき、『枕草子』における「天部」関連章段の冒頭をかざる序章として企画されたものではないか。

初段にはまた春夏秋冬や暁朝昼夕夜の季節や時刻の記載がある。自己の発見を具体的にかたるには、条件を限定し、「日は」「月は」「雲は」との重複をさける必要もあったろうが、四季は初段に不可欠の素材である。勅撰集をはじめ歌書は四季の歌を巻頭におく。岸上慎二氏は『中世文学I』で、第二段「ころは」の特色にふれ、「これも亦巻頭を占めるべき性質の文章」であるとい

い、「二重巻頭」になることを一つの理由にして「春は曙」が最初から巻頭に存在したことを疑っている。

ころは、正月、三月、四月、五月、七八九月、十一二月、すべてをりにつけつつ、一とせながらをかし。　(2)

「ころは」は右のように月を中心に歳時をいう。「歳時部」はどの類書にもある重要なものだが、初段は「天部」のなかに「歳時」をもち、二段は「歳時」に終始している。またわが国の類書に影響を与え、部類の基本となったとおもわれる『芸文類聚』や『初学記』は、春夏秋冬を「歳時上」、節日を「歳時中」や「歳時下」に部類している。二段の歳時は巻頭にふさわしくない。作者は初段に四季をかこうとした。「雨・風・霜・雪」をくわえて「天部」を充実させるために「霜」と「雪」が必要となり、「冬はつとめて」をかいて主題の天空を「天部」に拡大させたのか、四季をかくために「冬」を不可欠として「霜」や「雪」を必要としたのか、そのいずれとも考えられるが、初段が類書の「天部」と「歳時部」の重要事項を素材にしていることは明瞭であり、「天部」「歳時部」に関連をもつ章段の序段として執筆されたと想像してよかろう。

「天は、春は曙」の場合、主題は「天」である。「春は曙」は春曙の空をいい、「春」や「曙」は主想ではない。しかし、「天は」をもたぬ「春は曙」において、「春」と「曙」の素材としての価値は重い。この論理を逆にたどれば、歳時を重視したとき、「天」や「天部」を主題とすることは不可能となり、初段は空に強い関心をみせながら、「天は」で文章をはじめることをやめたのであろう。清少納言の分類学がふつうの類書のように「天部」ではじまったか、勅撰集等の歌集のように四季の「歳時部」を冒頭におくか、推測するのは困難だが、初段が「天部」と「歳時部」の両部をもち、「天部」を重視していることから推測して「天部」をさきとし、「天・日・月・星・雲・雨・風・霜・雪・春・夏・秋・冬……」の順序であったと考えておく。

3

初段には「天部」「歳時部」に属さぬ素材として、「夏は夜」の「蛍」と「秋は夕暮」の「烏」「雁」と「虫」がある。「鳥部」「虫部」は「木部」「草部」とともに類書の終末部をしめる。

『芸文類聚』
第八十一巻薬香部・草部上　第八十二巻草部下……第八十六巻菓部上　第八十七巻菓部下　第八十八巻木部上　第八十九巻木部下　第九十巻鳥部上　第九十一巻鳥部中　第九十二巻鳥部下　第九十七巻鱗介部下・虫豸部……第一百巻災異部

『初学記』
第二十七巻宝器部花草附　第二十八巻果木部　第二十九巻獣部
第三十巻鳥・鱗介部・虫部

『白氏六帖事類集』
第二十九鳥獣　第三十草木雑果

『新撰字鏡』
五十八木　五十九草　六十禾……六十三鳥……六十九虫……一百七連字

『倭名鈔』
羽族部第二十八……虫豸部第三十一　草木部第三十二
『千載佳句』
(8)草木部　(9)禽獣部……(15)仙道部
『古今六帖』第六
草　虫　木　鳥
『江吏部集』巻下
(13)木部　(14)草部　(15)鳥部
『東宮切韻』（川瀬一馬氏『古辞書の研究』（昭31・11）の推定による）
(3)植物　(4)動物……(13)国名
『季綱切韻』（川瀬氏の推定による）
(3)植物　(4)動物……(27)両音
『本朝無題詩』
(7)植物（木・草・竹）　(8)動物（鳥・虫・獣）……37山洞
『綺語抄』下
動物部
鳥（虫）（貝）（獣）
植物部
草　木　竹　葛
『色葉字類抄』
(3)植物　(4)動物……(22)名字
『和歌童蒙抄』
第七草部・木部　第八鳥部　第九獣部・魚貝部・虫部　第十雑体・歌病・歌合判

『新撰字鏡』『東宮切韻』『季綱切韻』『色葉字類抄』の字書は「木・草・鳥・虫」を巻末におかず、『千載佳句』『本朝無題詩』の詩書も同様であるが、『倭名鈔』『江吏部集』には巻末にある。『芸文類聚』は「虫」のあとに「祥瑞部」と「災異部」があり、『和歌童蒙抄』にも「雑体」「歌病」「歌合判」がつづく。しかし前者の場合も巻末に近いことは承認してよいし、後者も巻一〇は、巻一から巻九にいたる「――部」とは類をことにしており、巻九の「虫部」を部類部分の最終部と考えることができる。「木・草・鳥・虫」で部類をとじるのが類書の基本である。

初段に「鳥」や「虫」が登場するのは、秋の夕焼の空にとぶ鳥や雁や、夏の闇夜にとぶ螢や秋の虫の音を、「あはれ」「をかし」とおもい、自己の発見をかこうとしたためであろうが、他の素材とちがって「天部」や「歳時部」に属さず、類書の最終部分の「鳥・虫」であったのは偶然だろうか。作者は初段に「歳時部」の春夏秋冬を加えたとき、「天部」の序章から〈類聚段〉の序章へと構想を拡大させたのではないか。こうしたおりに彼女の心にはすぐに「木・草・鳥・虫」が想起されるようだが、そのなかから「鳥・虫」をとくに選抜し、「雨・風・霜・雪」と「鳥・虫」で〈自然物を代表した〉のではないか。この部分も類書の構造を意識して構想されたということができる。

「冬はつとめて」の「火」や「灰」はどうであろう。「日入りはてて風の音虫の音などはたいふべきにあらず」で「秋」をむすんだ作者の関心は地上にうつった。地上の雪霜をかいた彼女の視点

は次第に身近かなものにうつる。「火などいそぎおこして炭もてわたるもいとつきづきし」から、彼女が火をおこしてそれをはこぶ姿を考える必要はないが、そんな光景を近距離でみていることは明らかだ。そして彼女は火桶のかたわらに座し、その灰がちな火をみてとうとう「火桶の火も白き灰がちになりてわろし」といってしまう。

自分の特殊な発見をかいて自己をかたろうとする作者の意図は、初段のそこここにうかがわれた。彼女のこの欲望はあるときもった「天」をかこうとする構想を「天部」に拡大させ、さらに〈類聚段〉の序章へとますます拡大させたが、この欲望を規制し、方向づけたのは類書の構造であった。「火」や「灰」の記載を類書との関連において考えることは不可能であろうか。類書に「火」を「天・日・月・星・雲・雨・風・霜・雪」に接続する「天部」、あるいは、「春・夏・秋・冬」の「歳時部」や「木・草・鳥・虫」に隣接する部類方法があればよい。

『初学記』第二五巻「器物部上」は巻末に「火」をおくが、「天部」「歳時部」に遠く、「木・草・鳥・虫」にも直接関連はない。『倭名鈔』巻第一二「燈火部第十九」にも「燈火類百五十六」「燈火具百五十七」「燈火器百五十八」があり、『和歌童蒙抄』第六「漁猟部」は「鵜河」や「照射」をもち、「資用部」にも「火」があるが、『初学記』同様、『枕草子』とは無縁である。

「火」の部類は類書によってさまざまである。『芸文類聚』は第八〇巻を「火部」とし、さらに「火・烽燧・燈・燭・庭燎・竈・薪炭灰・煙」の細目をかかげる。「薪炭灰」は「白き灰がち」の「灰」を想起させて興味ぶかい。「火部」は「天部」や「歳時部」に遠いが、第八一巻は「薬香・草部」で「木・草・鳥・虫」に連続する。この部類は『江史部集』にも継承され、中巻の「火部」(12)に下巻の「木部」(13)「草部」(14)「鳥部」(15)が連続している。これを採用すると「天部」「歳時部」ではじまり、「火・木・草・鳥・虫」でとじることになり、初段の「火」はこの部類方法によって登場したようにもおもわれるが、初段には「木・草」を欠く。「木・草」を捨てて「火」を加え、「火……鳥・虫」という型にした理由がわかりにくい。

「火」の部類は『芸文類聚』や『初学記』の方法がすべてではない。『白氏六帖事類集』巻第一は「霜第二十・露第二十一・霧第二十二」に「氷第二十三・火第二十四・灰第二十五」を連続させる。『新撰字鏡』も「五雨・六風」につづけて「七火・八連火」を配列し、『古今六帖』は第一帖の「天」中に「霜・雪・霰」につづけて「氷・火・煙」をおく。『類聚古集』も巻第四「天部」の最後に「霜」につづけて「煙」をおき、巻第十二には「寄物述別思」中に「日・月・露・火・雲雀……」の順に「火」を配列する。これらの書によると、「火」や「灰」は「天部」に属し、「雨・風・霜・雪」に連続する。さきに天空への執着を地上にうつし、最後に火をのぞきこむ不思議さをのべたが、「火」や「灰」は地上の「霜・雪」とともに「天部」に所属したものであった。「天」や「天部」を重視した作者が「火」を構想に加え、これに言及するのはきわめて自然である。奇妙な表現になるが、彼女は地上の霜雪や火桶の火や灰を天上のものとし、日月や星のように

仰ぎみていた。

4

初段の構想は類書の影響を濃厚にうけた。池田亀鑑は『倭名鈔』や『古今六帖』の影響を指摘しているが、両書の部類方法は、『枕草子』とかならずしも一致しない。初段執筆時の清少納言の分類学は「天・日・月・星・雲・雨・風・霜・雪・火・春・夏・秋・冬……木・草・鳥・虫」であったようだが、『倭名鈔』は「天」をかき、「火」も「天部」にはない。「天部」につづいて「地部」「水部」があり、「歳時部」はそのつぎになる。『古今六帖』は「天部」のまえに「歳時部」をおき、『枕草子』とはことなるようだ。作者が配列の順序を明確にのべているのは、「雨・風・霜・雪」と「木・草（あるいは「草・木」）・鳥・虫」だが、この部分にも相違がある。

枕草子	雨 風 霜 雪	木 草 鳥 虫
倭名鈔	雨 風 雪 霜	鳥 虫 草 木
古今六帖	風 雨 霜 雪	草 虫 木 鳥

「雨・風・霜・雪」は「天部」のなかの配列順序にすぎず、三者の間の相違はわずかなものがだが、「木・草・鳥・虫」は「木部」「草部」「鳥部」「虫部」として独立して各部を構成する。また、『枕草子』が植物、動物の順序でもつとも一般的な配列方法をとるのに、『倭名鈔』と『古今六帖』の配列はきわめて個性的である。さきに参照した類書や字書の配列順序を表示しておこう。はじめに中国の類書をあげ、他は年代順とする。『本朝無題詩』以降は作者のみるはずのないものだが、『枕草子』の部類方法の特異さを知る資料として掲げた。

芸文類聚	風 雪 雨 ／	草 木 鳥 虫
初学記	風 雨 雪 霜	草 木 鳥 虫
白氏六帖	雨 雪 風 霜	鳥 虫 草 木
新撰字鏡	雨 風 ／ ／	木 草 鳥 虫
千載佳句	風 雨 雪 ／	草 木 鳥 ／
三宝絵詞	／ ／ ／ ／	木 草 鳥 虫
江吏部集	風 雨 雪 ／	木 草 鳥 ／
古今集古注	／ ／ ／ ／	草 木 鳥 ／
本朝無題詩	雪 雨 ／ ／	木 草 鳥 虫
綺語抄	雨 雪 霜 風	鳥 虫 草 木
和歌初学抄	風 雨 霜 雪	木 草 鳥 虫
類聚古集	風 雨 霜 ／	草 木 鳥 虫
和歌童蒙抄	風 雨 霜 雪	草 木 鳥 虫

『枕草子』の「雨・風・霜・雪」は他に例をみない、めずらしい配列のようだ。もっとも類似しているのは、『倭名鈔』『古今六帖』『和歌初学抄』『和歌童蒙抄』であろうか。「木・草・鳥・虫」「草・木・鳥・虫」は一般性をもったものだが、「鳥・虫」の部で終るのは、『芸文類聚』と『初学記』、同時代のものでは『江吏部集』、『枕草子』以後のものとして『和歌初学抄』『和歌童蒙抄』と減少する。さらに「天部」を「天・日・月・星・雲」ではじ

め、「天部」の終りに「火」をもち、それに「歳時部」の「春・夏・秋・冬」が接続する類書となると、これらの条件にたえる書物を『枕草子』以前のものから発見することはできない。

散佚した類書や字書も多い。『秘府略』は一〇〇〇巻のうち二巻をのこすにすぎない。巻第八六四が「百穀部中」、巻第八六八が「布帛部」であるから、全一〇〇巻の第八五巻を「百穀部・布帛部」とする『芸文類聚』に類似した部類方法をとったようだ。羅振玉は『修文殿御覧』との関係を指摘しているが、この『御覧』も佚書である。残巻として『鳴沙石室佚書』は「鳥部」をおさめるが、汪紹楹氏が中華書局版『芸文類聚』('65・11)「前言」に指摘するごとく、『修文殿御覧』の佚文かいなかの検討はまだ十分には行われていない。「御覧」の名は平安朝の文献にしばしばみえ、『芸文類聚』や『初学記』以上にわが国の類書に大きな影響を与えたようだ。『和歌童蒙抄』第七は、『御覧』巻三一一の「橘部」を引用して、「盧橘」が「橘」であることをいい、この分類法を絶対視して「此をみて四条大納言朗詠集には、盧橘子低と云へる詩をばいれたるにや」という推測までしている。『玉海』によると、『御覧』は三六〇巻だが、通常の類書では「果部」か「木部」に入る「橘部」が三一一であるというのは、「木・草・鳥・虫」を終末部におくふつうの部類を採用したと推測される。『修文殿御覧』や『芸文類聚』はわが国の類書の藍本となり、あるいは部類方法の祖型をかたちづくったが、清少納言の座右の類書は国書であり、和文の歌枕に類したものではなかろうか。

池田亀鑑は「学問的には類聚抄、芸術的には六帖の感化を受けて」と「美論としての枕草子」(『国語と国文学』昭5・10)にいうが、『倭名抄』と『古今六帖』のみで『枕草子』の分類学を形成することはできない。しかし、その他の多数の類書を操作し、接合して独自の体系をたてたのだろうか。すでに脳裡にある部類配列の方法で執筆していようが、ときおり参照する書籍もあまり多数にはおよんでいまい。初段の執筆にさいし、彼女はすでに相当量の〈類聚段〉をかき、その再編成を必要としており、類書の構造を強烈に意識していたと考えられる。再編成の方法や初段の構想を規定した類書は座右にあるか、脳中にあるか、もとより不明である。その書名が明確になるはずもないが、脳中にあるものとしても、多数の類書を繙読してえたものではなかろう。初段の構想を規定した類書のおおよその姿を想像することができる。

左の表に清輔の『和歌初学抄』をかかげた。『枕草子』にもっとも近い配列方法をとっているが、これは「物名」の部である。清輔はここに「天」から「十二月」にいたる一六四の名詞をあげ、それぞれの品名や事象名に関する和歌用語をしるしている。「風・雨・霜・雪」「木・草・鳥・虫」が『枕草子』に類似するばかりではない。

(1)天 (2)日 (3)月 (4)星 (5)雲 (6)風 (7)雨 (8)霧 (9)霜 (10)雪 (11)樹雪落 (12)時 (13)春 (14)夏 (15)暁 (16)朝 (17)朝夕 (18)晩 (19)地 (20)山 (21)峯……(94)～(104)(木) (108)～(127)(草) (128)～(140)(鳥) (141)～(144)(虫) (145)～(148)(獣) (149)氷 (150)水 (151)火 (152)一月……(164)十二月

「天・日・月・星・雲」ではじまり、「天部」のあとに「春・夏」

（「秋・冬」を省略する理由はわからない。誤脱であろうか。）の「歳時部」がつづく。しかもそれにつづいて「暁・朝・朝・夕・晩」がある。通常の類書にはみえないので無視してきたが、『枕草子』の「曙」（暁）「夜」「夕暮」（夕）「日入りはてて」（宵）「つとめて」（朝）「昼」という時刻も類書との関連において考察する必要がある。

すべてのものを所有するのが類書であり、初段の言葉が類書に存在するのは当然とする意見もあろう。しかし、何十万、何百万語をもつ類書と比較しているのではない。「天」から「山」にいたる二〇の名詞の多数が『枕草子』の初段に存在し、しかも推定した順序で登場することを重視したいとおもう。初段にないのは、「天」「星」「霧」「樹雪落」「時」「地」の六名詞である。『枕草子』に「天」はないが、空をながめ、その景色を表現しているとして除外することも不可能ではないが、『初学記』の「天」には「天部」の意味もあろう。同様に「時」は「春」以下の「歳時部」、「地」は「山」以下の総称であり、それぞれの部の標題と考えることもできる。これらを除外すると、無関係な言葉は「星」「霧」「樹雪落」の三語にすぎない。

「木・草・鳥・虫」が終末部の近くに位置しているのもよい。ただし「火」は「天部」にはなく、「虫」のあとに「獣」「氷」「水」「火」の順序でつづく。そのあとに「一月」から「十二月」が連続して「物名」をおわるが、月名の部分は他とことなる。「天」から「火」にいたる部分は

天　アマノハラ　ヒサカタ　アマ　アメ　アマノウミ

火　エジノタクヒ　イサリタクヒ　イサリビ　スクモビ　カヤリビ　ウヅミビ　トブヒ　トモシビ　アシビ　カゞリビ　ニハビ　アマノトモシビ　タクヒ　モシホビ　オキビ　石ヨリイヅルヒ　ノビ　カビ

「天」や「火」に関連した歌語を多数列挙するが、月名の部分は

正月　ムツキ　ムツビ月

十二月　シハス　シハセ月

それぞれの月名と語源をあげるにすぎない。この部分を「物名」とは無縁なものとして除外すると、「物名」は「天」ではじまり、「火」でおわる。さきに「火」の所属を「天部」とし、「雨・風・霜・雪」に接続するものと考えてきたが、「木・草・鳥・虫」のあとに「火」をおき、「火」で類書をとじる。『和歌初学抄』の部類方法でも十分に理解することができる。

『和歌初学抄』には、「歌は物によせてそへてよむやうあり。なぞらへ歌といふにや」と縁語的な詠法を指示し、「天」から「思」にいたる六三語をあげ、それに「よせてそへる」歌語をかかげる「秀句」の部がある。「物名」とはことなり、(1)「天」、(2)「月」、(3)「日」、(4)「雲」と、「日」「月」が入れかわり、終末部にあるはずの「木・草・鳥・虫」が、(27)「鳥」、(29)「蜘蛛」、(30)「木」、(31)「草」と中間部におかれるなど、配列がみだれているが、「火」の場合も、(43)「玉匣」、(44)「鏡」、(45)「髪」、(46)「薫物」、(47)「火」の順に登場し、「火」を「器物部」とする部類を採用したことを考えさせる。「火」の扱い方は類書によってさまざまであり、清輔は「物名」執筆にさいし、「天部」においても、「器物部」におい

ても不適切な「火」をたまたま終末部においたともみられるが、「天部」にいれるべき「氷・水・火」を忘れ、誤脱に気づいて最後の部分に補ったというものかもしれぬ。

『和歌初学抄』の「暁・朝・朝夕・晩」は一般の類書にはみられぬもので注目してよい。「夕」と「宵」を「晩」で代表させたが、「昼」と「夜」を欠くのはなぜであろうか。初段は「秋は夕暮」の「日入りはてて」を「宵」とすると、「曙（暁）朝・昼・夕・宵・夜」のすべてがそろう。『綺語抄』上も「天象部」につづいて「時節部」をもち、「春・夏・秋・冬」に関連する歌語につづけて、「暁・朝・夕・夜」に関連した「けさのあさけ」「あさなけに」「あささらず」「あさにけに」「おほぬさ」「いやひけに」「むばたまと」「ゆふかたまけて」等の言葉をあげる。「暁・朝・昼・夕・宵・夜」を「歳時部」に所属するのは『綺語抄』と『和歌初学抄』のみ、和歌に関する類書にかぎられると考えてよかろう。『枕草子』初段の構想を規定したのは、『源氏物語』や『新撰髄脳』によって当時多数存在したことのしられる、歌語の類書である「歌枕」や「髄脳」ではなかったろうか。

5

初段の構想は「天」から「天部」へ、そして〈類聚段〉の序章へと拡大したとさきにのべた。しかし、〈類聚段〉といっても、さまざまな章段がある。「日は」「月は」を「――は」型といい、「すさまじきもの」「めでたきもの」を「――もの」型という。「日は」「月は」の序章とはいえても、「――もの」型をふくんだ〈類聚段〉と考えることは可能であろうか。

『和歌初学抄』は『物名』のまえに「喩来物」の部をおく。清輔はこれを「むかしよりいひならはしたることあり」と解説し、「ひさしき事」から「よそなる事」にいたる四一のことがらをあげ、それぞれについて古くから比喩として使用してきた成句的表現を形成する歌語をあげる。

ひさしき事には　ミヅガキ　松ノハ　ツルノケゴロモ　イハホカメ　タケ　スミヨシ

かずしらぬ事には　ハマノマサゴ　ソラノホシ　チリヒヂ

「すさまじきもの　昼ほゆる犬。春の網代。三四月の紅梅の衣…」と似てはいないか。従来「――もの」型の〈類聚段〉は『雑纂』や『十列』との関係が考察され、筆者もこれに〈ものはづけ〉に類した言語遊戯性の存在することを注意してきたが、「――は」型と「物名」「――もの」型と「喩来物」という対応関係を認めることは不可能ではない。言語遊戯性を否定しないが、「作者はすさまじきもの」等で、新しい「喩来物」を創出し、自己の発見をやはりかたっているのではないか。『和歌初学抄』の「物名」のまえに喩来物があったように、「――は」型のまえに「――もの」型がおかれていたことも考えられぬではない。「春は曙」の初段と「――もの」型章段との間に、初段と「――は」型の章段とにみられた密接な関係が認められぬ以上、初段は「――もの」型を含んだ〈類聚段〉の序章として企画されたものではないと推定せざるをえない。

「日・月・雲・雨・風・霜・雪」と「鳥・虫」に関しては、序

章の言及に答える本論各論のかたちで「――は」型章段の「日は」(252)「月は」(253)「雲は」(254)「降るものは」(250)「風は」(197)「雪は」(251)「鳥は」(41)「虫は」(43)が存在した。しかし、「歳時部」に属する「春・夏・秋・冬・曙・朝・昼・夕・宵・夜」と「天部」に属すか、最終の部に配列されたか不明の「火」には、これに相当する「――は」型の〈類聚段〉はない。

『芸文類聚』は火・灰・煙を「火部」に部類するが、清少納言はこれらのものに強い関心をよせていた。≪三巻本≫附載の「一本」には「火かげにおとるもの」がある。「火」を主題にした段ではないが、「心にくきもの」(201)には、炭櫃の火に「もののあやめ」や、御帳の紐の「つややかさ」や鈎の「けざやかさ」をみ、火桶の火で内側の絵を鑑賞し、隣室の灰にさす火箸の音にまだ起きている人のあるのを知る記載があり、作者の観察力の優秀さを証明している。彼女は自分の目や耳のよさを自覚していたらしく、好んで他人のみおとしがちなかすかなるものに注目するが、炭櫃・火桶の火はとくに彼女が愛し、冬の景に欠かせぬものと考えていたらしい。「雪のいと高うはあらで」(181)「南ならずは東の廂の板の」(193)「今朝はさしも見えざりつる空の」(294)を参照されたい。「火」を主題とした段には「節分違などして夜ぶかく帰る」(298)がある。また、「松の煙の香」に注目した「いみじう暑きころ」(224)や「柴たく香」を主題とした「清水などにまゐりて」(229)の章段もある。

「火かげにおとるもの」「心にくきもの」は「――もの」型章段であり、火に注目した〈日記章段〉もないではないが、「火・灰・煙」に言及し、これを主題とする作品が〈随想段〉に属することは注目してよい。

初段の「春・夏・秋・冬」に対応する章段は、主題をそれぞれの事項に限定するときわめて少い。「ただ過ぎに過ぐるもの、帆かけ舟。人の齢。春・春・秋・冬」(260)も主題は「ただ過ぎに過ぐるもの」である。四季を主題にするのは、「冬は、いみじうさむき。夏は、世に知らずあつき」(118)のみであろうか。しかし、「春・夏・秋・冬」を「歳時部」に関する章段の代表とみてひろく関連章段をさがせば、「ころは」(2)「正一日はまいて空のけしきも」(3)「三月三日はうららとのどかに照りたる」(4)「四月祭のころいとをかし」(5)「正月一日、三月三日は」(10)「節は五月にしく月はなし」(39)などの多数の〈随想段〉を指摘することができる。

「曙・朝・昼・夕・宵・夜」をうける章段は少い。「時奏するいみじうをかし」(290)「あかつきに帰らん人は」(63)「目のうらうらとある昼つかた」(291)などの〈随想段〉のみであろうか。

初段は類書の構造を意識したが、はじめは「天」や「天部」の序章として企画したはずだ。作者の心の動きを今日どれほど正しく推測できるか、疑問をいだかぬではないが、天部の事項には、それに答える「――は」型の〈類聚段〉があり、「歳時部」にそれがないのは、やはりなんらかの理由がなければならない。彼女は、強い関心をもっている「雨・風・霜・雪」や「火」を初段にもりこみたいと思う。類書の体系を重視すれば、「春・夏・秋・冬」や「曙・朝・昼・夕・宵・夜」の事項もすべて充塡したい。

この二つの欲求を満足させるために、作者は、「霜」「雪」「火」と同時に「冬」「朝」「昼」をとり、主題を「天部」からいっきょに「歳時部」をふくんだ章段の序章へと拡大させたようだ。「冬天」をめぐって彼女の心のなかにこうした変化がおこったことを想像するが、初段の構想を推測するさい、「天部」と「歳時部」の差異や主題の両者への分裂は考慮する必要がある。

初段執筆のさいに、「歳時部」や「火・灰」に関する〈随想段〉がすでに成立していたかいなか、推測することは困難だが、すでに成立していれば、その作品にゆずって「――は」型の〈類聚段〉はあらためて執筆されなかったわけであり、初段以後に「歳時部」や「火・灰」に関する〈随想段〉を執筆したとすれば、「――は」型の形式を捨て、〈随想〉を選択したことを意味する。いずれにせよ、「春は曙」の初段は「――は」型〈類聚段〉の終焉を考察する視点を与えてくれるが、この問題は稿を改めることとする。

初段は岸上慎二氏が推測するように、「再編成が必要とせられた折、新に企画されて執筆された」ものである。その「枕草子」は初段で意識した類書の体系にしたがい、部類配列されるはずだ。計画だおれということもあるが、その「枕草子」が存在したと仮定しよう。初段は「――は」型〈類聚段〉の冒頭におかれるが、「歳時部」や「火・灰・煙」関連の〈随想段〉は、これに混入しているだろうか。《堺本》や《前田家本》のように、「ころは」「せちは」「冬は」「正月一日、三月三日は」等の〈随想段〉は、「――は」〈類聚段〉の変形としてこれに加えることは不自然でない。しかし、他の〈随想段〉はどうであろう。

類書は前行の類書を参照し、模倣する。初段から推測させる清少納言の部類は、『和歌初学抄』「物名」に近似するが、『枕草子』と「物名」の間に内容の面での影響関係はない。また、とくにその近さを感じさせた「歳時部」の「曙・朝・昼・夕・宵・夜」や「火部」に相当する部分をかつて存在した「枕草子」も完全に埋めてはいまい。『和歌初学抄』が「枕草子」の方法を採用して「物名」の部をかいたとは考えられない。両者の酷似は、両者が同種の類書の影響をうけたことを想像させる。それはおそらく歌語を集めた「歌枕」や「髄脳」の書であろう。『枕草子』の初段はこうした類書を中継に『修文殿御覧』や『芸文類聚』等の中国の類書の体系にしたがって構想され、執筆されたようだ。『枕草子』が類書としての一面をもつことは否定できまい。類書は本来、一般の読書界を対象にはしない。中宮の問いに対し、「枕にこそは」と答え、かきはじめた類書「枕」は定子を読者としたものであろう。以上、初段執筆にさいし、作者の心にゆきかうものを推測した。ひとびとはながなかしい春の夜の夢と笑うだろうか。

（未完。昭48・3・20）